

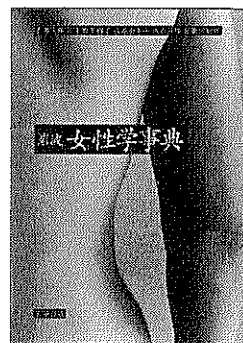


井上 輝子・上野千鶴子・江原由美子・  
大沢 真理・加納実紀代 編

## 『岩波 女性学事典』

(2002 岩波書店 541 P ISBN4-00-080203-8 C0530 4,600 円+税)

門 脇 厚 司



『女性学事典』と銘打たれたこの事典は、編者に人を得ての、また時宜を得ての歓迎すべき出版物である。

この事典の「女性学」の項でも適切な解説が施されているが、わが国で女性学(women's studies)の研究と教育が開始され全国的に広まっていったのは1970年代の終わり頃からである。そして、80年代に入るや、大学での女性学の授業の開設、専任の教授スタッフの任用、学会の組織化、研究紀要の発行など、いわば女性学の制度化が一気に進み、90年代になると、女性学に関する研究成果が『フェミニズム・コレクション』(全3巻)や『日本のフェミニズム』(全7巻)として刊行されるほどになり、今や、年間執筆され刊行される女性学領域の研究論文や学術書の数は伝統的な学問領域のそれらをはるかに凌ぐ状況を呈するまでになっている。

もちろん、この間、男女平等社会や男女共同参画社会の実現を目指した新しい法律の制定や制度づくりや計画の策定もまた一気に加速されてきた。かく言う紹介者も、茨城県で、1988年以降10数年間、いばらきローズプラン21推進委員会やいばらきハーモニープラン推進委員会の会長を努めたり、水戸市の男女平等推進条例づくりにかかわるなど、女性学の成果を女性行政に活かすべく微力を尽すかたわら、2000年6月の国連本部で行われた世界女性会議に出席したり、大学院でジェンダーフリー教育論を担当するなどして女性学の急速な広がりと進展を実感してきた一人である。

女性学は今や学問として立派にエスタブリッシュした(地歩を固め認知された)といっているし、その研究成果の恩恵を受けつつ性支配やジェンダーの解消を目指しつつ研究し、活動し、学習している人は相当数に上っているはずである。しかし、そうし

た人たちが増え、性支配が崩れてくるにつれ厄介な問題が生じてくるのもまた避け難いようである。各自治体で進んでいる男女平等条例づくりに対する保守的な男たちからのバックラッシュ(反撃ないし反動的な言動)や、ジェンダー理解の相違にもとづく女性研究者間の世代対立などがその一例である。このような折に、内外の女性学研究の成果を踏まえた関連用語の集大成ともいえるべき事典が刊行された意義は極めて大きいものである。

本事典に収録されている項目数は人名も含め858、執筆者は186名でほとんどが女性(男性の執筆者はわずかに8名)。女性学、ジェンダー、セクシュアル・ハラスメント、フェミニズム、母性、民法、婦人参政権、社会保障とジェンダー、天皇制とジェンダー、女性行政、人権と女性、女性労働訴訟など、重要な項目については400字詰め原稿用紙8枚(3,200字)ほどを費やしているが、ほとんどの項目が400字原稿用紙1,2枚ほどで説明されていて読みやすく、版型もB6判でハンディで使いやすい。難点をいえば値段であろう。箱入りにせず、その分いくらかでも廉価にすべきではなかったか。

ともあれ、先に書いたように、20年ほどの間に急激に進展してきたがゆえの抵抗や壁がいくつか生じている現時点でこのような事典が刊行された意義は大きいものである。女性学研究が達成した現段階での水準を再確認することで態勢を整え、バックラッシュに再反撃するためにも、また世代間の対立の源泉を整理し研究者や運動家間の対話を進展させるためにも、また各地で展開されている学習会のレベルアップを計るためにも、本事典が大いに役立つであろうことを確信する。

(かどわき・あつし 筑波大学)